



こーひーぶれいく

もう一つの柔道大会

瓜 谷 章

Uritani Akira

読者の皆様は、高専柔道大会というものをご存知でしょうか。正式には全国高等学校専門学校柔道優勝大会といい、戦前、日本全国の旧制高校、大学予科などが参加して毎年行われ、若者の熱い血をたぎらせた柔道大会です。この大会で勇名を轟かせたのが、大正3年の第一回大会から7連覇を果たした金沢市の四高、第九回大会から8連覇を果たした岡山市の六高であり、今に語り継がれる熱戦が繰り広げられました。また、三角絞めなど、今日にも残る技がこの大会で数多く開発されました。井上靖の著書「北の海」は、この大会にかける四高の柔道部員の日常を自伝的に描写したものです。

高専柔道大会は当時の国状もあり、昭和15年に第27回大会をもって幕を閉じました。この大会はその後、昭和27年から始まった七大学戦に受け継がれました。七大学戦は、いわゆる旧帝国大学の北大、東北大、東大、名大、京大、阪大、九大が参加し、毎年夏に実施され、高専柔道大会とほぼ同じルールで行われます。その特徴は、15人の団体勝ち抜き戦であること、勝敗は一本をもって決すること、そして最大の特徴は寝技中心の柔道ということであり、そのために国際ルールなどでは禁止されている“引き込み”が認められていることです。引き込みは文字通り、いきなり寝技に持ち込む技です。高専柔道大会においても最大の特徴であった寝技中心の柔道は、体力、経験に恵まれないナンバースクールの学生が、いかに負けないようにするか考え抜かれた末にたどり着いた柔道

です。立ち技は体力や才能によるところが大きいのに対して、寝技は練習さえ積めば、体力や経験に勝るものにも十分に対抗することができます。これを端的に表すのが、先の「北の海」にも登場する「練習量がすべてを決定する柔道」という言葉です。

さて、現在の大会ですが、昔と変わらず熱い試合が毎年繰り広げられています。寝技の試合では相当の力量差があっても勝つのは難しく、また体力を消耗するので、2人以上に勝つのは至難です。逆に言うと、1人の敗戦がチームの敗戦に直結するのです。そのため、選手は考えられないような粘りを発揮します。絞めが入ろうと関節が極まろうと“まいった”をする選手は皆無です。絞めの場合は落ちるまで、関節技の場合は肘が壊れるまで頑張り続けるわけです。そこまで頑張らなくてはならないというルールがあるわけでも、強制されているわけでもなく、ただただチームのために己を犠牲にして頑張るのです。優勝校以外は、傍目も気にせず皆号泣という、今でもそんな大会が残っているのです。

私も学生時代には、「北の海」に登場する破天荒な受験生、大天井こと故 小坂光之介先生の教えを受けることができ、他のすべてを捨ててこの大会にかけていました。教員となった今は部長として部員を鼓舞しています。平成21年の大会は6月13、14日に講道館において開催される予定です。もし関心を持たれましたら、観戦にお出で下さい。（名古屋大学）